

自己の発話によって捉えられる
—— 聴声経験の病を分析するものとしての倫理学 ——
本間義啓（成城大学非常勤講師）

1 聴声経験を通して自らを語る

本稿の目的は、「聴声」をテーマにして、主体の自己性を脅かす病を哲学の問題として分析するための言説を構築することである。精神病理学、精神分析は幻聴に苛まれる主体の多様な病態を記述、分析し、なぜ、どのようにして声を聞くのか、どのような声の聞き方が主体の自己性を危機にもたらしているのかを問題にしてきた。その一方、哲学は、ソクラテス以来、自分の声を聞く経験と他者の声を聞く経験について語り、あるいは、デリダ以降、この言説そのものを批判的に反省することもしてきた。哲学にとって、精神分析等の声についての言説は有益である。なぜなら、聴声経験における主体の構成を、病や妄想や狂気という自己性の危機の可能性を考慮に入れた上で、分析することができるからであり、また、その具体相を様々な症例を通して思考することを可能にするからだ。声を起点にとる時、哲学と精神分析の対話は有益なものとなるだろう。1) 聴声についての哲学的言説を吟味するために、幻聴を分析する精神分析や精神病理学のテキストを読解する。2) 聴声主体の自己構成を、その危機の可能性を議論の中心にすえて、哲学的に分析する。3) そしてこの作業を通じて、哲学と精神分析の間で、聴声主体を分析するための言説を構築する。この三つが本研究で行われている具体的な作業である。以下にその概要を報告する。

声を語る哲学的言説を病との関連において捉える試みは、精神分析においては、とくに真新しいものではない。ラカンが言うように、「精神分析は、その黎明期において、良心の声を〔精神病の声の現象〕に帰するにやぶさかではなかった」¹。哲学的な主体の聴声経験（良心を「声」として記述するのは哲学の伝統と言ってよい）を、主体の病態において捉える試みはめずらしくないにせよ、しかし、その射程はいまだ精査されていないように思われる。精神分析が哲学的聴声を精神病と比較したとしても、それを哲学への侮蔑と受け取る必要はないし、声を聞く主体が全て「異常」と考える必要もない。「異常」・「健常」の区別を脇に置いて、聴声経験における主体の自己構成の在り方を厳密に問い直さなければならない。なぜ、どのような意味において、声を聞く経験を幻聴の経験に近接させて語ることができるのか。幻聴という観点から良心を論じること、いかなる生産的な意義があるのか。どのような仕方で声を聞くことが、主体の自己性を危機にもたらし、危機における主体性はいかなる仕方で存立しているのか。こういった問いこそ、本研究が答えを与えようとしているものである。

声は、必ずしも、自己との近さにおいて自己同一化を可能にする対象というわけでもないだろう。哲学者が語る聴声は「通常」や「日常」や「自己への近さ」といったものを崩壊させるような「衝撃のモメント」として記述される。たとえばハイデガーが語る良心の呼び声。それは各自の自己へ向かって呼びかけられつつも、「遠い所から遠い所へ」と鳴り響くように感じられ、何事も語らず

¹ J. Lacan, *Écrits*, Éditions du Seuil, 1966, p. 772.

「黙止の様態」で話すとされる。重要なのは、それが「私のうちから、しかも私を超えて」聞こえらるるとされる点である（『存在と時間』第五七節）。つまり、それは私から響きつつも、私が自分のものとすることができない類いのものとされる。また、レヴィナスにおいては、主体は他者の顔から「汝殺すなかれ」と命じる声や、迫害する他者への責任を負うよう命じる声を聞く。レヴィナスは、声は「耳を聳する外傷」をなすとし、その聴取を〈私〉の自己性、主体性の失調の経験として記述したのだった。これらの経験は異様である。しかし、異様な声について語る哲学は自らの言説を病んだものと認めることはない。むしろ、声についての哲学的言説は真理を標榜している。その真理とは何か。それは主体、自己、〈私〉の真理である。哲学において声は、主体の自己性の構成に関して重要な契機をなすとされてきた。本来的に自己であるために、他者のための一者であるために、自らに法を与える理性的存在者であるために、自己、主体、〈私〉は声を聞いていなければならない。たしかに、声は私が私であることを可能にする特権的な対象であるかもしれない。しかし、カント、ハイデガー、レヴィナス等において顕著であるように、聴声経験は、自己の内面性のまっただ中で生じる外部性、他性の試練として記述されてきた。したがって、聴声経験は、自己との近さというよりも、自己との疎遠さにおいて自己を構成すると言った方が適当だと思われる。

哲学的聴声において問題となるのは、自己の、エゴの真理なのであり、この真理は聴声として経験される。そして、まさにこの真理こそが、精神分析が哲学的聴声を精神病のそれと同列に置くとときに、一個の問題として吟味されるべきものとなる。つまり、自己の真理は狂気にも近いのではないだろうか。もし精神病者が聞く声と哲学的聴声に近いのだとしたら、自己の真理と狂気の近さが問題になっていると考えられるのではないだろうか。声を通して、自らの真理を探るとき、その経験は、狂気でもあるような自己性の失調という試練ともなりうるのではないか。聴声経験における真理と狂気の近さ、それこそが自己性の病の場所なのではないか。あるいは次のように問いを重ねることもできるだろう。自己が自己であることを追求することが狂気ともなりうるのではないか。声によって自己性へと辿る経験は、自らの語りにおいて狂気に近づくのではないか。

当然ながら、自らが聞く声を語ることによって自己について語る言説そのものが何らかの病を証すものとなるわけではないだろう。声によって自己について語る特有の仕方があり、そして語る主体の特有の構造があるのであって、それが自己性の病の指標となるのであろう。自らであろうとして自らを語ることとその病理との関係について理解させてくれるものとして、長井真理によって分析された「内省型」と言われる統合失調症における自己観察の亢進がある。

2 見る自分を見る、話す自分を聞く

統合失調症などにおいて自他の境界が不明瞭になる症状を伴う自我障害が経験されるが、この経験の当事者が自らの病んだ自己を内省において捉えようとするケースがある。当事者は「執拗なまでに自己観察をくり返し、自らが被っている病的変化をありのままに——決して無理な因果関連のうちに置いたり、妄想的に関係づけたりすることなく——捉えようとしている」²。そして長井に

² 長井真理『内省の構造』、岩波書店、一九九一年、七一頁。

よれば、自らの病態に気づき、それを言語化しようとする行いそのものに問題が生じる場合があると言う。つまり、内省性の充進それ自体に潜む病理があるのであり、それは精神病に特有の症状として観察されうる³。それはどのような語りか。自己の語りの病の指標を明確にするために、長井は「事後的内省」と「同時的内性」という二つの内省の仕方を区別する。「事後的内省」の例として長井はある患者の自己の語りを次のように報告している。「私は与えられたものしかこなすことのできない人間。人と喋るときでも、私はただ聞いているだけ。自分から言葉が出てこない。頭の中を整理して言葉にすることができない。私は一般の人と異なった頭を持っている」⁴。自分は「他の人と違う」という意識を持ち、他の人が普通にしていることができないという反省を執拗に続け、「欠如態としての自己規定」を行っていると言長井は言う。これに対して「同時的内省」としては次のようなものが報告されている。「人と一緒にいるといつも、みんなの中にいる自分と、それを客観的に見ている自分と二人いる。どんなに夢中になっても、外から見ている自分がいつもさめている。心から人の中にとけこめない。外の自分がいつも自分を管理しコントロールしている。人と喋っているときも、他人の言葉を聞くのは外の自分で、それを内の自分に伝えて、それを聞いて内の自分が喋りだす。外の自分が指令したことを内の自分が喋る」⁵。二つの内省の差異は、明確である。事後的内省とは、たとえば、他者に対して発話する自分について反省するものであるが、同時的内省においては、発話行為そのもの、しゃべっている最中の自分を反省するものと言える。それは、例で出されたように、話している自分を、あたかも外部にいる人が自分を捉えるかのように、自己自身を外から見るという事態として経験される。

長井によれば、この二種類の内省の違いは、自己の対象的認識と自己の非対称的認識の差異として表現されうるものであり、この差異を起点にして、自己の自己への関係が異なる仕方で構築されると言う。第一の場合、自らを「他の人間とは違う」人間、何らかの「～である者」として、自己を対象的に捉える。ある主体が自らを対象として捉えるとき、そこには「自分を捉える自分」（主我）と「捉えられる自分」（客我）の関係があり、この関係は、後者に対する前者の優位性によって規定される⁶。たとえば、〈私〉（主我）は「私」（客我）を～だと思ふとき、〈私〉は自らを～である者として対象化し、それに同一化している。こうして〈私〉は自らを～である「私」として規定する。この自己規定が「事後的」とされるのは、内省が往々にして過去形によってなされる点を強調するためである。つまり、私は自らの語りにおいて自らを「私は～した」あるいは「おまえは～した」という言表の主語として捉えるということである。

これに対し「同時的内省」は、自らを対象化することも、自らを完了時制においてとらえることもしない。「～した私」ではなく、「～している私」そのものを捉えようとするものである。それは、たとえば次のような形で言い表される。「人と一緒にいるといつも、みんなの中にいる自分と、それを客観的に見ている自分と二人いる」。あるいは「自分を意識しすぎる。絶えず自分で自分を見つめているからテレビなど見ても頭に入ってこない」。このような同時的内省において生じ

³ 前掲書、一八五頁。

⁴ 前掲書、七六頁。

⁵ 前掲書、七八頁。

⁶ 前掲書、八二頁。

ているのは、〈私が〉自らを「～である私」として対象化するというよりも、〈私は〉「～している」当の〈私〉を見ると言うことであり、つまり主我-客我という関係ではなく、主我-主我という関係であると言えよう。私は「自分を見る」というよりも、「見ている自分を見る」のであり、私は「～した」私であるという対象的な規定を与えるのではなく、主我としての自分、「見ている」自分を見ようとするのである。

長井による同時的内省の分析の中に、自己の真理と狂気の近さという我々の研究テーマを明確化するに役立つ三つの問題を取り出すことができる。それは1) 〈私〉の異他化、2) 他者への同一化、3) 自己性の病である。

1) 主我としての自分を自分で見ようとするとき、私はまるで、自分を自分の外にいる他者を見るかのように見ている。長井が言うには、「「主体」は、人と喋ったりテレビをみたりという、現実のその場その場での経験的行動をする「主体」であると同時に、その場面を背後から見つめている「主体」である。(…) 自己を自己自身がみていると同時に、自己は自己自身によってもみられてもいる」⁷。この「みている」と同時に「みられている」意識によって、自己の内省における自己把握のうちに他者性が入り込む。まるで他者を把握するような仕方ですらを捉えるということによって生じる他性である。他者が自己の外で観察されるのと同じように、あたかも〈私〉が自己の外の他者であるかのように「私」を自己の外に対象として立てる。この意味において、〈私〉は「私」を自分の外に見る観察者のようになる。あたかも他の人間が「私」を対象として捉えるかのように私は〈私〉を捉えるということだ。私の異他化というのは、見られる私の異他化でもあり、また同時に見る私の異他化でもありうる。

他者が自分を見ているかのように、見ている自分を見る。見ている自分を見ることができるとするならば、そのとき、見ている自分が自分である限り、この自分に見られていることにもなり、自分が見ているにもかかわらず、見られているという奇妙な経験に置かれていることになるだろう。とはいえ、通常、自分を見るときに、見つめられているという感覚には陥らない。だが、見ている自分に「見つめられる」という被注察感を感じられるとしたら、見ている自分が自己から解離しているからにはほかならない。「見る」と同時に「見られる」ときに、「見る自分」が解離し、「見られる自分」のほうに傾くことがあり、その経験が被注察感ということになる。あたかも、自分自身から〈私〉が解離し、それが「私」をまるで他者を見るかのように見るということになる。こうして、自己への接近が自己による他我の把握と近接することになる。長井が言うように、「「同時的内省」という形での自己自身のへの関係の在り方は、現実の対人場面に置ける自己と他者との関係のありかたに、その構造上近似している」⁸。また、この同時的内省と他者把握の構造的に類似に関して、木村敏は次のようにのべている。「同時的内省を構成している二つの自己のうち、片方が容易に他者性を帯びることになる。「見ている自己」のほうに他者性をおびると、そこから「他人が自己を観察している」という注察念慮が発生してくることになる(…)」⁹。

2) おそらく、「健常な」経験においては、自分自身を見る時、見る自分を見ることもないし、

⁷ 前掲書、八七頁。

⁸ 前掲書、八九頁。

⁹ 木村敏『分裂病と他者』、ちくま学芸文庫、二〇〇七年、二六五頁。

自分によって見られると思うこともないのだろう。つまり文字通りには自分自身を見ることはしていないのかもしれない。だが、内省の充進においては、見ている自分を見ようとし、これによって見られているということが起こる。しかしながら、それは必ずしも「異常」とは言えない。自分を他者が見るように見ることは対人関係に置いては往々にして起こる。たとえば、実際に他者と話しをしている時、この他者と話している自分を見ているということは起こりうる。私は他者が私をどう見ているかを気にしているとき、他者と話す自分を殊更に意識する時があるだろう。そのとき、私は他者が自分を見ているように、つまり、私を見る他者の視線を想像し、それを通して他者に同一化することによって、自分を見る。自分を他者にとっての他者であるかのように想像し、これを見る他者へと同一化することによって、自分自身を見る。このように「他者によって見られている」感覚は、他者への同一化によって形成されることを強調しなくてはならないだろう。他者を見るように自分を見る時、自己の自己への関係は、自分を見る（想像的な）他者への同一化を媒介することによって、他者への関係となるのだ。

3) 自らを見つつ、自らを他者のように見るとするなら、二重の仕方で、自・他の境界は曖昧なものとなるだろう。まず、自分を他者を見るように見ることによって生じる客我の異他化。次に、私自身を見る時、見られるという意識に偏向し、自らを見る私から解離したときに生じる主我の異他化。このような自己の異他化は、自己認識の失調の起因となりうる。通常、外にあるべき他性が、自己と自己の関係の内にあるとしたら、自-他の境界線が誤って引かれることになるであろう。内的な他性あるいは外的な内密性の出現によって、自己と他者の境界が曖昧になり、自己の自己性が失調するのであろう。

興味深いのは、この自己の内部にある他性は、まさしく自己が自らを捉えようとする試み、すなわち内省そのものにおいて形成されるという点である。もし自己を自身によって見ようとすることによって、自己が他者性を帯びるとしたら、自己と他者の差異は失われ、自己が自己であることを感じることは困難になる。ただ、この定式は抽象的である。この自己の内に他性が生じる仕方をも少し厳密に見なくてはならないだろう。

ところで、長井はもっぱら「見る」自分を起点にして自己の内省の問題を分析しているが、「話す」自分についての内省、すなわち自分が話すのを聞く経験についても報告している。「自然に言葉が出て来る。人に喋らされているみたい。誰かがAやBやCという記号を発信して、それがぱつと頭の中に入って、その記号が組み合わさって言葉になって出てくるみたい。私はつまりアンテナみたいなもの」¹⁰。この患者は、話す自分を内省によって捉えようとするとき、話すという行為が作為体験であるように語っている。つまり、話している自分は話をさせられている、というわけである。興味深いのは、この作為体験を訴える同じ患者がまた次のような仕方で、発話する自分について語っていることである。「人と喋っているときも、他人の言葉を聞くのは外の自分で、それを内の自分に伝えて、それを聞いて内の自分が喋りだす。外の自分が指令したことを内の自分が喋る」。この患者は、発話する自己についての同時的内省において、自らの発話を「外の自分」からの命令によって「内の自分」が語ることであると感じている。長井によれば、これは「作為体験との境界

¹⁰ 『内省の構造』、七六頁。

線上にある体験だが、しかし意味上はまさに「作為体験とは逆」であるとされる。長井は、この患者は他者を前にして語る時、自らが自らであるために自らの発話をコントロールしようとしていると言う。自らの語りを、自らによって命令されたものと考えることによって、自らの発話の自律性を確保しようとしていることなのだろう。しかし、このコントロールへの執着そのものが内省性の亢進という症状を形成することもある。発話する〈私〉を殊更に意識し、この〈私〉が、それを捉えようとする私にとって、あたかも他者であることとして現れることもありうるのだ。発話する〈私〉が解離し、発話が異他的になるとしたら、自分で話しつつも、それを自分のものとして感じられず、他者から受け取ったもの、つまり聞いたものとして受け取ることになるだろう。かくして、自らの発話そのものによって内的他性が生じ、自己と他者の境界が曖昧になるということが生じる。

3 聴声経験の病を分析するものとしての倫理学

ここまで長井による「同時的内省」の分析をとりあげ、自己性の病、自己が自己であろうとするものの狂気の問題を考察した。そこから以下の2点のテーゼが導き出される。1) 自己が自己であることの探求は、内省の亢進において、自己の他性を産み出す。自己の他性は、自らが自らであろうとしながら、自らに対して自らが異他的になることによって生じる。2) この他性は、逆説的にも、「自己を他者の手にゆだねてしまわないための」抵抗によって生じる。自己を自己自身によって規定しようとする試み自体が、自己性の失調と結びついていることが推察されたのだった。自己の真理と狂気を近接させるような自己の語りがあるという仮説を立てたが、長井の「同時的内省」の分析は一つの答えを与えている。すなわち、自己を見つめる特殊な仕方(そしてそれを語る仕方)において他性が自己の内に生じ、それが自他の境界性を曖昧にするということである。

長井の分析は自己の内省を「見つめる」という経験を中心にして捉えているが、本稿のテーマは聴声を中心において自己の病を捉えることである。それゆえ「言う」ないし「聞く」という経験における「内省」の構造の分析を試みなくてはならない。

長井によって報告された患者の例においては、発話する主体の同時的内省は、自己性の病という問題に関して、二つの特徴を提示していた。1) 自己の発話が、他者によって発せられた記号によって発話することとして経験される。そして、2) 自分の発話が(「外の自分」によって)強いられているという感覚に襲われる。長井の分析に従って言うならば、内省それ自体が内的他性を産み出し、それによって自らの発話を強いられていると感じるのだと言える。しかし、発話主体の内省性の構造をさらに精緻に分析しなければならない。なぜ、どのようにして、話している自分を捉える時、この話す行為が自己から離れ、発話が強いられたものとして感じられるのであろうか。どのようにして話す〈私〉が私から解離しうるのか。なぜ私は私の発話によって捉えられるのか。

それは、発話主体の構造そのものに原因がある。視覚と対比するとわかりやすいだろう。見る自分を見ようとすることはできる(たとえ不可能であっても)。だが話している自分を話すことはできない。話す自分を捉えようとするとき、それは聴声という経験を経ているわけではない。ここ

に発話における自己への集中の特殊性がある。すなわち、自らの発話行為を捉える時、それは聞くという経験をなす。自らを聞こえずに話すことはできないと言われているように、発話という活動は聴声の受動性を含んでいるのだ。「話す自分」を捉える時、「自分が話すのを聞く」という経験を通して、「話す私」が「聞く私」や「聞かれた私」の置き換えが起こる。ここに声という対象の特異性がある。声とは、それによって話している自分を感じることを可能にする（声帯の振動等を通じて）と同時に、それに対して受動的に聞く態度を強いるのだ。

この自己の声という特異な対象が発話主体の自己性の形成過程において大きな意義を持つことを明らかにしたのはフロイトである。フロイトもまた、自己観察と自己性の病理の問題に言及していた。フロイトは『ナルシシズム入門』において、パラノイアにおける観察妄想を「哲学的内省にまで高められた」批判的観察と形容している¹¹。フロイトは、自己自身を他の対象であるかのように観察し、これを批判する自己批判こそが、パラノイアにおける観察妄想を形成するものと考えた。自己を注視、批判する〈私〉の一部分が他の部分から解離する。パラノイアにおいては、それは自己のものとしては認められることはなく、敵、迫害者と化す。そしてフロイトは、この他者による監視を主体に告げ知らせるのが声であると強く主張していたのだ。

フロイトは、パラノイアの観察妄想、迫害妄想を主体の自己観察から導き出し、またそのとき、この自己観察のうちに良心という自我に対する批判機能を位置づけている。フロイトにおいて興味深いのは、まさに、この内省の病理が倫理意識の問題として扱われている点である。フロイトは超自我について述べる時、幾度もカントの倫理学について言及しているように、精神分析の倫理についての言説は哲学のそれと無関係ではない。ラカンもまた「精神分析の倫理」というテーマのもと倫理についての特異な考察を展開するとき、カント倫理学に言及し、また「おまえは～しなければならない」という声の問題に独自の解釈を与えていた。セミナー『精神分析の倫理』において、倫理の哲学史の見取り図を作り、カント倫理学における〈法〉の問題に関して特異な解釈を与えていたことからわかるとおり、ラカンは、フロイトよりも明示的に、聴声の問題を、倫理学の問題であることを示していた。

おそらく、精神病における迫害妄想、観察妄想、言語性幻聴は主体の倫理意識の病的な表れなのであろう。パラノイアや統合失調と言わずとも、他者との関係において主体は多かれ少なかれ病むことがあり、その苦痛は倫理意識と無関係ではないだろう。こういった発話主体の病に対して、哲学は何の寄与ができるのだろうか。これが、フロイトやラカンが、哲学的聴声を精神病のそれと比較したときに、哲学に対して精神分析が投げかけた問いであらう。精神分析による呼びかけに対して、哲学はいかなる応答を与えることができるのだろうか。

ひとつの応答として考えられるのは、聴声にける主体の病を分析しうるものとして倫理についての言説を構築する試みである。声についての精神分析の考察を経由することによって、倫理学について新しいアプローチを試みることができる。すなわち、自己の声を聞く様態を分析し、発話主体の構造を、その病の可能性から把握しようと試みるアプローチ、倫理についての自我論的アプローチである。倫理学とは一個の自我論でありうるものであり、自らであらうとし、自らを失う主体の自

¹¹ *Zur Einführung des Narzißmus, Gesammelte Werke, Bd.X, Imago Publishing Co. Ltd., 1949, S. 164.*

己性の病を分析しうるのだ。いかにして自らの発話を捉えるか、あるいは、それによって捉えられるのか。いかにして自己の声を再び聞くことができるのか。自己の声の聴取の様々な在り方を精査することによって、自己性の病の問題を分析することができるのである。本稿の冒頭で、「聴声」を起点にして精神分析と哲学を横断する言説を模索すると言ったが、倫理学こそ、それであると言える。